

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討 その7

早樫 一男

語り手：古川秀明さん（ふるかわ家族カウンセリング研究所長 臨床心理士）

〇はじめに

前回に引き続き、「家族造形法のおもしろさと難しさ」がテーマです。今回は一人語りです。語り手の古川さんは、ふるかわ家族カウンセリング研究所長として、対人援助領域、相談現場において活躍されています。

研究所の主催として、2002年から「家族援助を目指す人のための研修会」を京都キャンパスプラザで開講（5月～12月 月1回 19時30分～21時30分）。私が進行役をつとめてきました。今年で、10年目となる研修会には、福祉領域、看護領域を始め、さまざまな対人援助領域からの参加者が含まれています。内容は、もちろん、家族造形法を使った事例検討です。

〇それでは、古川さん、よろしく！

造形法のおもしろさと問われると、立体的に家族を理解できたり、家族の気持ちをその役割を演じるひとから直接聞けるということなどがあるが、私の場合は人間のつな

がりを感じることだ。その家族の中で、そういうポジションに置かれると、人というのはたいてい同じようなことを感じたり、考えてしまうということに驚きとつながりを感じてしまう。

家族造形法の研修会を10年続け、たくさんの実際のケースを研修会で検討したが、役割を演じる人からのコメントは驚くほど事実に近い。これを悪用すれば怪しい占いや宗教にも応用できそうだ。もちろんそんなことが目的ではない。あくまでもケースを考える上でのスキルなのだから…。

しかし、何ゆえ役割を演じる人はここまで事実に近いセリフを言ったり、感情を経験したり、行動を言い当てたりできるのか。演劇をする人がよく「役作りをする」とか「役に入り込む」とか言うがそれとはまた違うものなのだろうか…。

「共感力」なのか、あるいは何らかの無意識の誘導が造形を作る人から役割を演じる人に伝わるのか…。

これを「乗り移る」という表現を取ったらそれこそカルト宗教みたいになるので表現が難しい。勿論、役割を演じる人と、その役の実人物とはまったく接点はない。いや、逆に接点が合ったほうが事実とは離れて行くのかもしれない。

その人が持っているイメージとか、先入観が作用してそれらしい話にみんながまとめてしまうかもしれないからだ。

役割を演じる人はケースごとに毎回違う。当然個人の生育暦も違うし今現在さまざまな問題を抱えている人もいる。けれど、造形法で役割演技をすると、誰がどの演技をしてもその言動は事実になる。

相手の身になって物事を考えろとか、相手の気持ちになってみるとかよく言うけれど、造形法をやっているいつも思うのは、自己と他者を分けている境界は何だろうかということである。私のこのような造形法に感じているおもしろさやつながり感覚は、同時に私のこれからの研究対象でもある。

○ここで一言（早樫からのコメントです）

古川さんは「役割を演じる」という表現の中には次のような流れが含まれています。

事例提出者は「粘土のかたまり」と見立てて、家族役を置いていたり、作っていきます。そして、「静止」の中で、湧き上がってくる感情や身体感覚に注意を向けていきます。演じるという言葉からは、ロールプレイをイメージする人があるかもしれませんが、造形法の場合の「役割を演じる」というのは、徐々に浸み込んできた感情や気持ちに沿って、表現（言語化）する、時には動くといった意味が含まれています。

○さらに、おもしろいのは…。（引き続き、古川さん、よろしく！）

造形法では時間を自由に操作できる。現在、過去、未来とどんな時間でも作り出すことができる。場所も想像力さえあればどんな設定も可能である。これもおもしろさのひとつである。タイムマシンと、ドラえもののどこでもドアを手に入れたようなものだ。

○難しさをあげるとすれば…

まずは造形法を実施するのに、必要な場所の確保である。ある程度のフロア（ステージ）は必要。多くの会議室や研修室は当然のことながら机や椅子があり、それだけでスペースはいっぱいである。机、椅子を片付けて、尚且つ一定のスペースの確保ができないといけない。かといって、体育館では広すぎる。

会場準備に手間と人手が必要になる。

ある程度の人数の確保も必要である。できれば、最低、家族の人数分の参加者はいて欲しい。造形法は役割を演じる人と同じくらいそれを観察しているギャラリーの意見も重視する。なので、理想は家族の人数分の粘土とその数と同じ数のギャラリーがいればいいと思う。5人家族のケースなら、粘土5人、ギャラリー5人くらいがいて欲しい。

参加者には造形法の説明がある。特に初めて参加する人には、なぜこういうことをやるのかの説明が必要であろう。よくある質問に「役割としてコメントするのですか？本当の自分としてコメントするのですか？」と聞かれる。「どれが本当の自分かわからない」「役割の人と自分とは別の人間なので、こんなことをしても意味がない

のでは？」これらの質問に答えられるようにしておく必要がある。

○これまでの経験から…

研修会等で造形法を実施するとかなり盛り上がる。まるで子どもの学芸会のような雰囲気になることもある。参加者のコミュニケーションを促進するにはとても効果的に働く。しかし、ただおもしろいだけに終わらせてはいけない。

ファシリテーターの力量はかなり問われる

○その他…

最近は自分で家族造形法をアレンジして試している。相談者がひとりで来た時に、相談者と一緒に家族の問題を考えるのに何とか造形法を使えないか……。勿論急に人を呼んで造形法をするのは無理。そんな時間も場所もマンパワーもない。

そこで箱庭を使ってみた。これなら相談者が一人でも大丈夫。箱庭のグッズには、家族の人形は勿論、家具調度品、家（日本建築からログハウスまでである）、庭、ペット、仏壇、幽霊まで揃っている。場面を設定したらそこに人形の家族を置いてもらう。誰から置くのか、どういう順番なのか、視線はどこか……。最近の人形は手足などが自由に動くので、かなりの表現が可能だ。勿論、生の人間が造形法をしているような温かみはないが、かなりの効果はある。純粹な箱庭療法でやるような分析的なことはできないが、セラピストに守られている感覚や、砂遊びによる開放感などは同じ効果が望める。

箱庭に置いた家族の人形をみて、「家族はどんな気持ちでしょうね？」と尋ねたり、「このお父さん人形をこう移動させたらこの子ども人形はどう感じるでしょうね？」というのを相談者と一緒に考えられる。「今のこの家族の形を理想の家族の形にするには誰がどのように動いたらいいですか？」「そうなるためにはどの人形がどうすればいいですか？」応用範囲は広い。セラピストと相談者が家族の箱庭を一緒に俯瞰するのは、ジェノグラムの作成プロセスにも似ている。

これからも研究を重ねたい。

もうひとつ考えているのは、母親のための自分で作る家族造形法。造形法は、援助者が次の展開を考えるために行うことが多い。これを、母親が自分の家族を作って、粘土といろいろやりとりしたらどうなるだろうか……。

主観的で感情に流されない、何か新しいひらめきや発想、行動の指針などが生まれないだろうか。別に母親限定でなくても、父親や子どもでもいいのだが、まずは母親で試してみたい。

○おわりに…

古川さん、興味深い語り、ありがとうございました。これからも、家族造形法のよき理解者の一人として、活躍を期待しています。

なお、「家族援助を目指す人のための研修会」に興味のある方などの問い合わせは、ふるかわ家族カウンセリング研究所のHP「tantant.net」から連絡ください。